



視察研修等報告書

令和7年2月28日

坂井市議会

議長 戸板 進 殿

会 派 名 創政会
報 告 者 前川 徹

1. 日 時 令和7年1月29日(水)～31日(金)

2. 視察研修先 (1) 「リュウキンカの郷」
熊本県球磨郡あさぎり町深田西 879-1
(2) 鹿児島県南九州市役所
鹿児島県南九州市知覧町郡 6204 番地
(3) 国立大学法人鹿屋体育大学
鹿児島県鹿屋市白水町 1 番地

3. 視察研修内容 (1) 農村民泊、農村レストランの取組について
(2) 文化遺産を活かした観光事業について
(3) 運動による地域住民の健康・体力づくり、介護・認知症予防の取組について

4. 参加者 田中哲治議員 前田嘉彦議員 佐藤寛治議員 前川徹議員
山田秀樹議員 岡部恭典議員 鍋嶋邦広議員 廣瀬陽子議員
佐藤岳之議員 林豊夏議員 (10名)

5. 内容詳細

- (1) 「リュウキンカの郷」農村民泊、農村レストランの取組について

「リュウキンカの郷」は、『食』の郷育拠点として、「人」「地域」「文化」を繋げる食のエコミュージアムを目指している。

郷育(きょういく)

「食」そのものが故郷であるという考え方。地域の食の歴史、文化、作り手、素材、物語、思いを知ることが地域を知ることであり、先人たちの知恵・技・暮らしを未来に活かすことである。

食のエコミュージアム

受け継がれた自然や暮らし、先人の知恵や技、歴史。食のエコミュージアムは、地域全体を食文化の博物館に見立て、その文化を保存・育成・活用する取り組みのことである。「リュウキンカの郷」は、「食のエコミュージアム」の中心として、地域の資

源や施設とサテライトとして繋がり、来訪者が地域の新たな魅力を発見し、地域住民が地域への愛着や誇りを高められるよう、この活動を進めている。

(2) 「鹿児島県南九州市役所」文化遺産を活かした観光事業について

南九州市の観光は、昭和40年代前半に知覧武家屋敷庭園群が文献で紹介されたことがきっかけである。昭和55年から道路や公園等のインフラ整備を行い、歴史と景観を活かした潤いのある街並み整備として、街路樹に刈り込まれたイヌマキの整備、鯉の泳ぐ水路整備、和風の街路灯や石灯籠の設置、電柱移設等を行い、武家屋敷や平和をモチーフに和風で落ち着いた佇まいの町づくりが進められた。

また、昭和50年には知覧特攻遺品館が開館している。昭和62年には知覧特攻平和会館が新築され、より多くの資料展示や語り部による講話等の受入態勢が充実していった。

しかし、鹿児島空港からの直行バスの廃止、新型コロナウイルス感染拡大の影響があり、近年は観光客の減少が続いている。また、南九州市には宿泊施設が少なく日帰りが主流の観光になっており、観光消費額と滞在時間の拡大も課題の一つである。宿泊以外の分野で滞在時間を延長し観光消費額を向上させる取組として、「自然を活かしたアウトドア施設整備」「観光予約サイトの運用」「新ご当地グルメの開発」を進めている。

(3) 「国立大学法人鹿屋体育大学」運動による地域住民の健康・体力づくり、介護・認知症予防の取組について

令和4年10月7日、スポーツ庁及びUNIVASの委託事業である「令和4年度大学スポーツ資源を活用した地域振興モデル創出支援事業」の一環として「目指せ鹿屋健康寿命日本一プロジェクト事業」が始動しました。この事業は、ICTを活用した介護予防プログラムを地域在住の高齢者を対象に実施し、効果の検証及び発信を行うものです。長期的な目標として、鹿屋市の要介護認定率を20%の水準に維持すること、ICTを活用した運動プログラムを令和6年度までに開発することを計画しています。この事業に関わるNPO法人ウェルスポ鹿屋の取組みについて伺うと共に、実際の現場を見学した。

6. 所見・感想等

(1) 「リュウキンカの郷」農村民泊、農村レストランの取組について

(田中 哲治)

築150年超の古民家を田舎風空間と近代的風空間をバランスよく取り入れたリノベーションを行い、訪れた方が満喫できるモダンな建物となっている。さらには、人吉熊地域の豊かな自然、伝統文化など生活の中から生まれてきた郷土の食を大事にし、「食」の魅力を発信する交流拠点として事業展開していました。緊急災害場所にもなっている。

とくに、地元の観光協会との連携を密にし、農泊がなければ地域の魅力はないとも言っておられた。(事業するにあたり、国、県の役割は大きかったようです。)

本市においても、空き家対策などの事業展開をするうえで、農泊や農村レストラン的な事業も進めるべきであると感じた。また、「地域づくりは人が大事」、「モチベ

ーション」を上げることである。食料をもっているから「農泊のネットワーク」が大事であることも確かである。

(前田 嘉彦)

平成18年からスタートした人吉球磨グリーンツーリズムの皆様と、昨年11月に竹田で親睦の機会を頂いたご縁で、今回、過疎地域における新たな交流の拠点づくりの実践活動施設のひとつである「リュウキンカの郷」を訪問してきました。

空き家を改修し、「食・農・命」をテーマに、農村民泊・農村レストランの拠点を造り、同じ様な理念をもつ仲間のネットワークも築きながら、新たなコミュニティづくりを行っておりました。人吉球磨地域内で農村民泊のネットワークをつくり、お客様に長期滞在して頂いても、飽きさせないように工夫しているようなことが感じられました。

地域の財産ともいえる素晴らしい食材を活かし「おばあちゃんの知恵・経験・技・感性」を次世代にも繋げていこうとする姿に感銘を受けました。

坂井市でも地域文化と食の魅力を生かして価値を高めている都市のひとつとして、食というキーワードを軸に、活力ある地域コミュニティを築いていければと思います。

(佐藤 寛治)

リュウキンカの郷が目指す取り組みは、「食」を軸とした「人づくり・生業づくり」を実践し、様々な視点から「食」を見つめ直し、地域資源、自然、文化、歴史などを複合的に繋ぎ、農村のコミュニティのあり方を創造していくとしている。

この様に地域の色々な特徴を活かし、食と郷育(きょういく)の取り組みを高齢者等を中心に実践、事業化していることは大変参考になったし、考え方次第で色々なことが出来ると感じた。

(前川 徹)

球磨川の上流部に位置する人吉市にある食・農・人の総合研究所「リュウキンカの郷」は、町中の古民家を改造し、郷土食を提供するとともに、宿泊できる部屋や設備を整えている。この古民家を拠点に、少人数でのオーダーメイド研修や、イベント事業に取り組み、命の源である「食」について、様々な観点から学び合い、実践している。地域の食の歴史、文化、作り手、素材などを知り、つなげることで、ふるさとの食文化を守り広げている活動である。

自己資金を出し合って作り上げたネットワークは、5年前の豪雨災害では食料支援を通じてさらに強固なものになったという。インバウンドにも対応するとともに、農福連携やグリーンツーリズムをとおして、農家のレベルアップと地方の可能性を高めていこうという強い思いは共感できるものであった。

古民家を利活用し、日本の農と食文化を守り広める活動は、坂井市でもさらに取り組める内容であり、紹介された数々のレシピは、研修生や観光客だけでなく、地域の食生活にとっても参考になるものと感じた。

(山田 秀樹)

平成18年からスタートした、人吉球磨(ひとよしぐま)グリーンツーリズムでは、現在、食事付き民泊施設19軒、レストラン5軒のラインナップがあり、都会のツーリストが農村地域に滞在し、自然や文化、人々との交流を楽しむ余暇活動に役立っています。時流の中で農家民宿事業者の高齢化、後継者問題、専従する地域コーディネータ

ーがないなどの課題が浮かびだしました。民泊施設の一つであるリュウキンカの郷は、この課題を食というキーワードを軸に、命の食事を学び、実践し、ひと・まち・暮らしを繋ぐことで、新しい農泊を推進するための学びと交流の拠点として、過疎地域における、新しいコミュニティを生み出していくことを目指しています。

伺って強く感じたことは、素朴な素材であるが、しっかり目的をもって育てられた野菜、吟味され愛おしく仕上げられた調理、最上級のもてなし愛をもって調理されたお惣菜は、非常に美味でした。

愛情の込められた料理は大金をかけても得られるものではなく、便利な世の中のなかで忘れがちになってしまう大切な要素を心に見える化として訴え、響く感動を共有することはまわりまわってまさに新しいコミュニティづくりの核といえます。スタッフの皆さんの笑顔や言葉から、初心を忘れず、真心のこもったおもてなしは必ず実る、という気概を強く感じました。

(岡部 泰典)

「リュウキンカの郷」は、「食」を軸とした“人づくり・まち作り・生業づくり”を実践しており、様々な観点から「食」を見つめなおし、地域の資源・人・自然・文化・歴史・先達からの知恵を複合的に繋ぎ、新しい農村のコミュニティの在り方を5つの取組で実践している。

- ① オーダーメイド研修 ② 命の食事プログラム ③ イベント・セミナー事業
- ④ 農村民泊事業 ⑤ 地域マネジメント事業

全ての活動が「食」「農」「命」をテーマに繋がっており、地域でお金を回す、できることを探す、そして何よりも仲間がいたから継続できているとのことである。

また、地域とその地域にある資源を繋ぐコーディネーターの重要性を唱えていた。国が農泊推進やグリーンツーリズムなどを進めていても、専従のコーディネーター役がない限り地方の魅力は伝わりづらい状況にあり、コーディネーターは地方において、人と人を繋ぐものでものであるとのことであった。

地元食材での郷土料理をいただきながらの歓談で、この活動に携わっている方々のバイタリティーと素晴らしい笑顔に感動した日であった。

(鍋嶋 邦広)

「食」そのものが故郷であるという考え方のもと、地域の食材のみに徹底的に拘り地域の食の歴史・文化・作り方を伝える事で、来訪者には地域の新たな魅力の発見を地域住民には、地域への愛着や誇りを高められるよう活動している事に感銘を受けた。食の宝庫でもある坂井市において、今後農村レストラン事業を推進する上で、とても参考になった。

(廣瀬 陽子)

リュウキンカの郷は、「食」を軸とした“人づくり・まち作り・生業づくり”を実践し、地域活性化の拠点として、それぞれの地域と広域で連携をされながら運営をされていた。

将来的には、オール九州でインバウンド企画、ツアーを考えるなど広い視野を持ち、活動をされていた。

坂井市でも自分たちの地域だけを考えるのではなく、リュウキンカの郷という九州のように、北陸、中部といった広域での観光に取り組む必要があると感じた。

都会やインバウンドで来られる人たちは、田舎暮らしが新しく、良く感じる。まさに坂井市には歴史もあり、海・山・田畑が揃っている。都会の方やインバウンドにアプローチできる取り組みは可能であると感じた。

(佐藤 岳之)

古民家を移築した「ひまわり亭」から古民家をリノベートした「リュウキンカの郷」までの21年間の本田氏の苦勞を、人に対して苦勞と思わせない人柄が、地域の女性たちの気持ちを前向きにまとめられているのかと感じるが、実際に出会い体験をすると、遥かにそれらを超越している。後継者もいるとの説明を受け、今後も注目していきたい取り組みである。

(林 豊夏)

リュウキンカの郷では、空き家を活用した古民家での郷土料理体験や、住民との自然な交流が印象的で、地域の暮らしそのものが貴重な資源となっていました。一方、人吉球磨グリーンツーリズム推進協議会では、農家民宿や体験プログラムを地域全体で支え合い、住民主体のネットワークが確立されていることに学ぶ点が多くありました。どちらの取り組みも、食や自然、文化といった地域固有の資源を丁寧に活かしながら、関係人口や交流人口の拡大につなげており、持続可能な地域づくりのヒントが多く詰まっていました。

(2) 「鹿児島県南九州市役所」文化遺産を活かした観光事業について

(田中 哲治)

南九州市は、平成19年に知覧町、顚娃町、川辺町が合併して誕生した。人口は約33,000人で、主な物産はお茶(知覧茶)、さつまいもなどで、観光スポットは知覧武家屋敷庭園群、知覧特攻平和会館など。

今回は特に、伝統的建造物保存地区の町並み保存についてであり、戦前に2箇所の庭園が国の文化財に指定され、昭和56年11月には地区の約18.6haが重要伝統的建造物群保存地区として選定を受けた。

事業経費

①直接事業(市が直接行う事業)：

市単独、国県補助→国65%・県5.25%・市29.75%

②補助事業(地区内の所有者または住民が行う事業)：

間接補助事業では、所有者等負担20・30%、補助金80・70%(国65%・県5.25%・市29.75%) 市単独補助(補助割合1/2・1/3 限度額100千円～500千円)

知覧武家屋敷庭園群では、観光案内の方が懇切丁寧に案内していただくこと、また庭園内外にゴミ散乱がなかったことなど、今後、坂井市の観光地などでも観光案内はもとよりゴミが散乱しないような観光地を目指していただきたい。

(前田 嘉彦)

南九州市知覧伝統的建造物群保存地区は昭和56年に選定された武家屋敷群で、生垣や庭園の木はきれいに剪定され、電線も地中埋設下ではなく、メイン道路より見えない位置に移設され見事な街並みが形成されている。

国の名勝に指定された7つの庭園の所有者で「知覧武家屋敷庭園有限責任事業組

合」を組織し、入園料の徴収やPR事業、生垣の剪定、病害虫の対策を行っており、庭園だけでなく通りに面した全ての敷地に対しても手入れしているとのことでした。

公衆無線LANの整備や多言語音声ガイドも導入し、知覧武家屋敷周辺の市営駐車場も無料化するなど、観光客にもやさしい文化遺産となっているようでした。今回、ボランティアガイドの案内により、効果的・効率的に武家屋敷群や庭園を見ることができ、あらためてボランティアガイドの有難みを感じられました。

(佐藤 寛治)

国の重要伝統的建造物群保存地区（昭和56年選定）にある知覧武家屋敷は令和5年7月に文化庁の文化財保存活用地域計画の認定を受けている。

いにしへの麓、知覧武家屋敷群を歩けば薩摩武士達の息づかいが聞こえるようである。

また、この武家屋敷群は旧街道沿いの両側に石垣、生垣が整然と続き、その間に武家門を持つ武家屋敷が並んでいて、とても優美で江戸中期にタイムスリップしたように感じられる。

この生垣の手入れ整備等は市民自ら行い、武家屋敷群は市と市民が共同で維持しているとのこと。

また、電柱は地下埋設でなく、建屋の後ろ側に建っており、目に見えないように工夫されている等参考になった。

(前川 徹)

南九州市の観光は、昭和40年代前半に知覧武家屋敷庭園群が文献で紹介されたことがきっかけであった。昭和56年に「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、国の「名勝」に指定された庭園の所有者等で組合を組織し、保存に取り組みはじめた。令和5年7月には「文化財保存活用地域計画」が認定され、保存だけでなく活用もあわせて、行政と市民が一緒になって、歴史文化を活かしたまちづくりに取り組んでいるものであった。

都市計画において、市街地を歴史と景観を活かした潤いのある街並み整備として、街路樹に刈り込まれたイヌマキの植栽、鯉の泳ぐ水路整備、和風の街路灯や石灯籠の設置、電柱移設等を行い、武家屋敷と平和をモチーフに和風で落ち着いたたたずまいのまちづくりがすすめられていた。特に工事費のかかる電柱埋設ではなく、移設で景観を保つ取り組みは参考になった。

また、坂井市と同じように宿泊施設が少なく日帰りが主流の観光地のため、令和5年から周辺駐車場の無料化を行うなどしたが、観光消費額と滞在時間の拡大は、当市も同じ課題であると感じた。

(山田 秀樹)

約260年前、知覧領主（18代）島津久峰時代の武士小路区割、武士を分散させて統治をおこなっていたことの名残りで、武家屋敷通りと屋敷庭園が保存されている風致地区です。重要伝統的建造物群保存地区の中を東西に通る延長約0.8kmの侍町の通りで、薩摩藩による藩政時代は、鹿児島への往来に使われた街道でもあります。

官民一体の歴史的建造物や景観の保全に配慮した街づくりでは、景観を損ないための武家屋敷通りの電柱対策は高額な工事費を要する埋設ではなく、移設で済ませました。また、通りの道路そのものは周辺の石垣や生け垣に調和させるために、シラス色

とよばれる名勝庭園の庭土と同じ色い特殊舗装が施されているなど、おおいに参考になりました。

(岡部 泰典)

南九州市は、日本一のお茶の産地として知られているが、文化財が豊富で昭和 56 年 11 月 30 日国の重要伝統的建造物群保存地区選定された「知覧武家屋敷」や「知覧特攻平和館」などの観光地があり、多くの観光客が訪れている。

さらに、令和 5 年 7 月には文化庁から文化財保存活用地域計画の認定も受け、地域総がかりで文化財を守り、活かし、伝える体制を構築している。

知覧武家屋敷庭園群を中心とする知覧の市街地は、昭和 55 年から道路や公園等のインフラ整備を行い、歴史と景観を活かした街並みの整備として、街路樹に刈りこまれたイヌマキの植栽、鯉の泳ぐ水路整備、和風の街路灯や石灯籠の設置、電柱移設等を行い武家屋敷や平和をモチーフに和風で落ち着いた佇まいの町なみが進められた。

地域の人が朝 7 時から武家屋敷の町なみの清掃を行っておりゴミ一つなく綺麗な景観が維持されていた。維持管理においても、武家屋敷庭園所有者等で組合を組織し、入園料の徴収と武家屋敷の所有者が自費にて通りの面した全ての敷地の手入れや建物の修復を行っている。

歴史に培われた古い町並みがあり、その財産を地域と行政で守っていく取組みは素晴らしいと感じた。

(鍋嶋 邦広)

知覧武家屋敷（知覧伝統的建造物群保存地区）は、昭和 56 年に、所謂、重伝建地区に選定され、7 つの庭園は国の「名勝」にも指定されていて、知覧の町中に入った瞬間、きれいに刈り込まれたイヌマキの植栽、鯉の泳ぐ水路整備、和風の街路灯や石灯籠が配置され、武家屋敷の町にふさわしい町並み整備がされていました。また電柱移設により、低コストで景観を守る工夫がされているところも含め、これからの坂井市、特に三國港地区の町並み整備を進めていく上で、とても参考になった。

(廣瀬 陽子)

昭和 45 年に都市計画の中で区画整備事業の計画がなされ、昭和 56 年に「重要伝統的建造物保存地区」として選定を受けている。保存地区選定以降は、文化庁の補助で街並み整備を行なっている。

知覧武家屋敷庭園群は、メインの通りから電柱が見えないように移設を行なっていた。電柱や電線が見えないようにするためには、埋設ありきと考えていたが、メインの場所から見えないよう移設するという考え方であれば、坂井市内の観光地でも行える場所があるのではないかと感じた。

(佐藤 岳之)

自治体が行う直接事業の他に、地区住民が行う保存整備の間接事業を推進し、10 年の節目には、その保存事業を振り返り、問題点や、保存方針・保存計画の見直しを図り、税の優遇処置も行うなど、継続的な取り組みが、今日まで多くの観光客を呼び込んでいると感じた。本市においても、丸岡町や三國町の町並みの無電柱化が調査・研究されているが、知覧武家屋敷庭園群の電柱のように、必ずしも埋設しなくてもよい、目に見えない工夫についても検討すべきであると感じた。

(林 豊夏)

南九州市では、知覧武家屋敷庭園群や特攻平和会館など、歴史と文化を活かした観光整備が進められており、和の趣ある町並みが印象的でした。一方で、宿泊施設の不足や観光客の減少といった課題にも直面しており、現在はアウトドア施設の整備や予約サイトの運用、ご当地グルメの開発などで滞在時間や消費額の向上を図っています。地域の文化資源を守りつつ、新たな魅力創出に取り組む姿勢に学ぶことが多く、今後のまちづくりに活かしていきたいと感じました。

(3) 「国立大学法人鹿屋体育大学」運動による地域住民の健康・体力づくり、介護・認知症予防の取組について

(田中 哲治)

今回の視察研修は、運動・スポーツを柱とした事業を通して、地域住民の健康・体力づくり、活力ある地域づくりに寄与することを目的として活動している中、運動による地域住民の健康・体力づくり、介護、認知症予防の取り組みについても運動を通じて展開している。

また、鹿屋市長は、大学との連携にあたっては、子どもから高齢者まで体力づくりや健康促進のためのプログラムなどで連携を深め、スポーツのまちを目指したいと言われているとのことで、今後、スポーツ資源をどう活かすかが課題である。

大学側は、今後に向けては大学だけではなく地域の方々の協力が不可欠である。また、安全運転体操での「する・みる・ささえる」など、地域の暮らしをよくする、支える。いわゆる、地域×行政×大学×企業で、地域へ新たな価値創生を見出すことである。

老若男女問わず地域などでのコミュニケーションを強化し、行政や企業等などとの連携を密にしていくことが不可欠と感じた。

(前田 嘉彦)

「大学で培ったノウハウを地域に還元したい」との考えのもと、運動・スポーツで楽しみづくり・健康づくり・地域づくりを目指して「NPO法人ウェルスポ鹿屋」が運営され、鹿児島県鹿屋市・垂水市、宮崎県児湯郡木城町などの自治体と共同事業を展開しています。

主な事業は、介護・認知症予事業、高齢者の体力評価事業、運動サークル育成事業、中高年者の健康・体力づくり事業などで、この日も、地域の高齢者の皆さんが大学生と一緒にゲームを楽しみながら、楽しそうに健康づくりや脳トレを行っている現場を見学させていただきました。チーム対抗戦で、徐々にゲームの難易度を上げながらの体力づくりと脳トレの両立は、介護予防の一つとして大いに参考にできる内容でした。

(佐藤 寛治)

令和元年にNPO法人ウェルスポ鹿屋を立ち上げ、高齢者向けの健康教室を開催して、健康・体力づくり、介護・認知症予防などに取り組んでいるとのことです。

また、産・官・学連携による健康支援プロジェクトでは、体育大学の特性を生かした取り組みを実施しており、参加住民が生き生きと取り組んでいる姿に感動いたしました。

教室では、高齢者は歩き方によって転倒しやすくなる為、それらの改善方法として、縦・横それぞれ、25cmの枠を縦10個、横4個の枠組みを作り、そこを歩くことで、

正しい歩き方が出来るとのことです。この方法は手軽に出来、坂井市においても普及できるではと感じました。

(前川 徹)

NPO法人ウェルスポ鹿屋は、国立鹿屋体育大学で培ったノウハウを地域に還元したいということが始まりで、高齢者を対象に「少しでも長く健康な状態を維持すること」を目指した取り組みを行っている。特に、大学の地元「花岡おこし会」の会員たちの様々な測定を年3回行い、大学で分析した結果を還元して健康維持に役立ててもらっている。

実際に大学で行っている健康教室を見学したが、代表の中垣内氏が考案したスクウェアステップ（25cm 四方のマスが横4、縦10 並べられたマットを使う）による体力づくりや脳トレ、学生とペアになってゲーム感覚で楽しみながら体力をつける活動は、高齢者がとても生き生きと参加している様子が伺えた。

坂井市の周辺には体育大学はないが、福井大学の教育学部や医学部、県立大学の看護学部などと連携した取り組みも考えることができると思った。

(山田 秀樹)

日本で唯一の国立の体育系単科大学であり、その施設の充実度から高い競技レベルの選手方が利用されています。地域の高齢者の健康プログラムを継続的に行える工夫の研究など、社会の様々な課題を解決するための大学や大学生ができる地域貢献、社会的に意義の高い授業、活動が行われています。科学的根拠に基づいた指導が行える人材の育成、科学と実践を結び付けられる人材の育成、日本人の体力向上や健康寿命の延伸を目標としている。

一方、設備では世界的アスリートを輩出する全国無二の能力測定設備に感服した。いたる方向から3次元測定するカメラやセンサー、細かいデータ測定を可能にした沢山のセンサーなど、改めて我が国の近代スポーツを支える環境に頼もしさを感じました。日本一の設備ということで交流人口は非常に多いです。交流人口を稼げる無二の施設など、我が市にも何か欲しいところです。

(岡部 恭典)

国立大学法人鹿屋体育大学で、運動による地域住民の健康・体力づくり、介護・認知症予防の取組について、健康教室にて体力づくりや脳トレなど楽しそうに汗を流している現場を見学させてもらった。

当日は、地元の「花岡おこし会」の方々が、大学の教員や学生たちとスクウェアステップ運動で歩きながらの体力づくりと脳トレを笑顔で楽しく取り組んでいた。

「NPO 法人ウェルスポ鹿屋」は大学で培ったノウハウを地域に還元したいと思ったことから始まり、地域の皆さんが少しでも長く健康な状態を維持することを目指している。

主な活動として高齢者向けの健康教室を開催しており、令和5年度は市内80か所延べ5,500人以上に健康指導を実施している。また、地元の「花岡おこし会」の皆さんには様々な測定を年3回ほど受けてもらい、大学で分析した結果を還元して健康維持に役立てている。

スポーツをする・みる・ささえる スポーツ運動を通して地域を支える活動は坂井市においても大いに参考とすべきと感じた。

大学＝行政＝企業　いわゆる産官学が上手く連携している取組みであった。

(鍋嶋 邦広)

鹿屋体育大学で培ったノウハウを、地元にも還元したいという思いから始まった、「運動による地域住民の健康・体力づくり、介護・認知症予防の取組」について、説明だけでなく、実際の現場を見学しながら体感する事が出来た。地元の皆さんが

笑顔で、楽しく取組んでいる様子と年3回ほどの測定によりエビデンスを取りながら健康寿命日本一をめざしているところは、これからの超高齢化社会を迎える本市にとっても、非常に興味深い取組みであり、運動不足＝死亡リスクの増大に繋がることから、大いに参考にしたいと感じた。

(廣瀬 陽子)

大学で培ったノウハウを地域に還元する NPO 法人ウェルスが鹿屋を設立し、高齢者向けの健康教室を開催している。令和5年度は、80 か所述べ 5,500 人以上に健康指導を実施している。視察時に、鹿屋体育大学の体育館で行われていた。大学生と参加者が一緒に体を動かし、チームで競うなどゲーム性もあり、参加者の目が輝いていたのが印象的であった。

市は、地域課題解決、市民は健康、大学は研修につなげるといった、それぞれの目的が合致し、連携がうまくいっているように感じた。

(佐藤 岳之)

鹿屋体育大学は、唯一の国立の体育専門の大学である。スポーツだけでなく地元自治体や企業と連携し、健康推進事業や幅広い世代にわたり、体力づくりを促進しており、最先端技術を活用したトレーニングを受ける事ができる。高齢者が学生たちと楽しく運動し、生きがい、健康づくりに取り組んでいる姿を拝見したが、健康都市宣言をうたっている本市としても、参考にすべき取組みであると感じた。

(林 豊夏)

鹿屋体育大学の視察を通して、地域に根ざした健康づくりやスポーツ振興への具体的な取り組みに深く感銘を受けました。市民向けのスポーツ教室やセミナーを通じて、子どもから高齢者まで幅広い世代が健康意識を高め、運動習慣を身につける仕組みが整えられていました。また、大学が地域の健康課題に向き合い、行政や医療機関と連携しながら持続可能なヘルスプロモーションを展開している点も非常に印象的でした。さらに今後は、大学・研究機関として蓄積したデータを分析・研究し、それを地域での実践に生かす取り組みを進めていきたいという意欲も感じられ、今後の展開がますます楽しみです。

7. 添付書類



熊本県球磨郡あさぎり町「リュウキンカの郷」



南九州市役所

会 派 内 供 覧

